

911.3

八

秋

林良技



俳林良枝集

秋之部

雙雀菴氷壺編集

秋

欄 少陰ハ西方西ハ遷多ク陰意遷テ物を落セ時ニカクテ秋ト  
ト云クハ難キナリ物等欽クテ成熟也

園 日西陸を降り 萬葉集 秋ノ云 園 秋ハ向ウ多クニ秋天ヲ法ルナリ  
○ 叶木 秋ノ多クアリ一説ト云キテ万葉集ト云ク 零落ト云ク 飛鳥ト云ク  
○ 叶木 秋ノ多クアリ一説ト云キテ万葉集ト云ク 零落ト云ク 飛鳥ト云ク  
高・明奈・葵萩・少皞・壽叔

七月

七月 夫則・聖秋・桐月・七夕ノ交をウーキクを云フ交をウーキクを云フ交をウーキクを云フ  
トモ交月トモ云フ夫則ハ七月ノ律ナリ  
蘭月 葉秋ト云フ

七月ト云フノつく星ノ光ノうら

葉 雅

文月

七月や水よきき所住居 休太  
七月や妹いよきききと希是 秋之  
七月の雨や鳥あふいぬいろ サキ ちよ

直に傳ふ

八月や水よきき所住居 休太  
八月や妹いよきききと希是 秋之  
八月の雨や鳥あふいぬいろ サキ ちよ  
八月や水よきき所住居 休太  
八月や妹いよきききと希是 秋之  
八月の雨や鳥あふいぬいろ サキ ちよ

秋一

立秋

けきの秋・秋の初風  
葉秋

文月や露のねんねあき 秋  
八月や水よきき所住居 休太  
八月や妹いよきききと希是 秋之  
八月の雨や鳥あふいぬいろ サキ ちよ  
八月や水よきき所住居 休太  
八月や妹いよきききと希是 秋之  
八月の雨や鳥あふいぬいろ サキ ちよ



秋の初風

秋の初風はむく冷るころに 上サ 拍案

秋風

秋の初風はむく冷るころに 上サ 拍案

秋の初風はむく冷るころに 上サ 拍案

秋の初風はむく冷るころに 上サ 拍案

秋の葉を戴

秋の葉を戴 園をらあ 秋の初風はむく冷るころに 上サ 拍案

秋あり

楸

楸葉は相葉と出で出たは花を咲く 上サ 拍案

楸葉 上サ 拍案

秋の初風はむく冷るころに 上サ 拍案

秋三

一葉

一葉 上サ 拍案

秋の初風はむく冷るころに 上サ 拍案

秋の初風はむく冷るころに 上サ 拍案

秋の初風はむく冷るころに 上サ 拍案

秋の初風はむく冷るころに 上サ 拍案

秋の初風はむく冷るころに 上サ 拍案

秋の初風はむく冷るころに 上サ 拍案

秋の初風はむく冷るころに 上サ 拍案

秋の初風はむく冷るころに 上サ 拍案

柳散

此物まゝくけしきりあつて相一葉下毛 葉似  
見ても今更風のまねごと一まうれ、種好  
宜きそ物にあそぶ柳七る 春久雄

西日まじ田舎の家名森茂る白川 柳泉

伴ののき柳やまうあり神下サ 十條

退屈家あまふらうて柳七る下毛 峰風

撮待

筆を世裏の人よのち 柳七るあうあまらうの  
月あそぶそまふ後きりあり

掬待やけりてそまふそまふ起る 棧荷

掬待やまの知人の合ま遊遊 良月

秋四

掬待やいまの心お首着梳 夢枝子

掬待や名あをまの細分限 得妻

掬待やりそ思をぬ人よ何ふ金 北長

せられたりよの心まきくる板うれ、花洞

掬待や情のまうる門のうち、洒島

きつ待やあま海をまらそく紀下サ 卜外

掬待やまのそまふまのまのま下毛 月昇

掬待や手箱まそまの情のま下毛 貞露

掬待の門ま情あま海をまら下毛 由凡

門茶

あまをくは魚市もくつ門茶は 信  
後摺の白きハ眼くつ門茶は 古  
傍に飯きりも星は門茶は 信

北野御手水

六日社政の古きまきハ  
七日あり

七夕

ひさうをむめ・おきりのひ楚・さうくよひ楚・七夕の  
ひあや・星合・星あつら・星の手向・星の敷・後女  
牛女・河鼓・女はあまをく・をたあまをく・ニハ星・いぬを  
とてつる

七夕の夜川を下る 筏うねり 揺蕩子  
七夕の夕飯さめ人 能あま 信氏  
七夕のやまを 高あり 能あま 信氏

星今宵

七夕の夜 信をたて 新橋の  
おまうつら 傍のうはく 一めあまをく  
信之

星迎

迎の務も 津南をくく 星あまを  
この電あまをく 能あまをく 信  
信之

星祭

星祭ハ何ものまき 信之  
の白をくく 信人ハ信之 星之  
水あまをく 信之 星之  
物あまをく 信之 星之 信之



星合

和合や和合のくくせり川の波 由縁  
星合や月合のまの空の河のり 不津

二ツ星

遠い河をぬ橋をくくよ二ツ星 茶枝子  
世のふりあつらふく星 下毛 虫 髪  
河の雲中とあつらふ二ツ星 兼欣  
世のふりあつらふく星 葛玉

星の糸

まの糸の糸しもの河の星の糸 下毛 常 晴  
世のふりあつらふく星 葛玉

星の別

世のふりあつらふく星の糸 下毛 常 晴  
世のふりあつらふく星の糸 下毛 常 晴  
星の別世のふりあつらふく星の糸 下毛 常 晴  
世のふりあつらふく星の糸 下毛 常 晴

彦星

世のふりあつらふく星の糸 下毛 常 晴  
世のふりあつらふく星の糸 下毛 常 晴  
世のふりあつらふく星の糸 下毛 常 晴  
世のふりあつらふく星の糸 下毛 常 晴

星ノ契

世のふりあつらふく星の糸 下毛 常 晴  
世のふりあつらふく星の糸 下毛 常 晴  
世のふりあつらふく星の糸 下毛 常 晴  
世のふりあつらふく星の糸 下毛 常 晴  
世のふりあつらふく星の糸 下毛 常 晴  
世のふりあつらふく星の糸 下毛 常 晴  
世のふりあつらふく星の糸 下毛 常 晴  
世のふりあつらふく星の糸 下毛 常 晴  
世のふりあつらふく星の糸 下毛 常 晴  
世のふりあつらふく星の糸 下毛 常 晴



貸小袖

硯洗

七箇池

梶の葉

羊の葉の露

さるねや羊のうらたけのし小袖 峰相

さるねうらたけのし小袖 峰相

さるねうらたけのし小袖 峰相

硯洗をうらたけのし小袖 峰相

さるねうらたけのし小袖 峰相

梶の葉をうらたけのし小袖 峰相

梶の葉をうらたけのし小袖 峰相

梶の葉をうらたけのし小袖 峰相

羊の葉の露をうらたけのし小袖 峰相

羊の葉の露をうらたけのし小袖 峰相

羊の葉の露をうらたけのし小袖 峰相

羊の葉の露をうらたけのし小袖 峰相

羊の葉の露をうらたけのし小袖 峰相

羊の葉の露をうらたけのし小袖 峰相

羊の葉の露をうらたけのし小袖 峰相

羊の葉の露をうらたけのし小袖 峰相

羊の葉の露をうらたけのし小袖 峰相

羊の葉の露をうらたけのし小袖 峰相

年ノ渡り

一年ノ渡り天の川をこするんや

高此間も高き羊の目も

雨もあつて雪もあつて羊の目も





益の月

空際の色も冥えり 玉露あり 葉交

玉柳やむきももろく風吹く 葉交

玉柳はむきしりし海や月照る 隅衣

草市 竹節や露の干ぬるをせと書く 玉露

草市や露のよ露のちりも何り 玉露

棚經 柳種や露のよあくも何と云ふ 下サト外

桐種や露の坊主の顔もせぬ 花酒

多糸種や露のちりも何と云ふ 令

桐種の色も何と云ふ 玉露

迎火

迎火や煙のよあけし州の先 下サ 狐成

日のいろも迎火をたぐい山家うれ 萬芸

むかし火もうけし海も今せし 唯風

鼠尾草

鼠尾草の葉も何と云ふ

鼠尾草の葉も何と云ふ 此二日 万枝子

鼠尾草の葉も何と云ふ 此二日 文種

鼠尾草の葉も何と云ふ 此二日 五伝

鼠尾草の葉も何と云ふ 此二日 素月

鼠尾草の葉も何と云ふ 此二日 玉碩

私米

瓜ノ馬

西瓜

麻売薯

りきまやまきり初りの真ん中 菓子子

飯の世にまきりもせつりや瓜の馬 甘茶

まきりまきりにるると控りく西瓜の乳 古 去来

まきりまきりまきりまきりく西瓜の乳 金 夢覚

まきりまきりまきりまきりく西瓜の乳 夢覚

まきりまきりまきりまきりく西瓜の乳 花月

まきりまきりまきりまきりく西瓜の乳 梅左

まきりまきりまきりまきりく西瓜の乳 文里

まきりまきりまきりまきりく西瓜の乳 味友

墓 奈

園よも有り

増七月初先祖の墓よまきりく西瓜の乳のん中

おきりまきりまきりまきりく西瓜の乳 重 龍祐

おきりまきりまきりまきりく西瓜の乳 重 龍祐

おきりまきりまきりまきりく西瓜の乳 重 龍祐

おきりまきりまきりまきりく西瓜の乳 重 龍祐

おきりまきりまきりまきりく西瓜の乳 重 龍祐

おきりまきりまきりまきりく西瓜の乳 重 龍祐

おきりまきりまきりまきりく西瓜の乳 重 龍祐

おきりまきりまきりまきりく西瓜の乳 重 龍祐

おきりまきりまきりまきりく西瓜の乳 重 龍祐







三井寺女請 三井寺へ坐す日の曠や女子を 一 亨

晩鐘の金瓶や女の三井 法 素切

志とやあや被るのらの三井 法 巢吹

三井寺やあへハ掛ふ女と也 優 優

ツトイリ 経法抄又曰昔ハ法ふは法と入ると家とよて秘能世と若翁  
衝定 法と入ると家とよて秘能世と若翁

勢あ山田は傳つてあは世ノ山田のつと入と云家城屋敷おと若翁

ふとあ貪欲の及とて結るお是をきん事の代めと  
兄世一むとあり七月十日自あう今ハ婚をあら

法と入のりし返向多し法り 法 一 飛

衝突入や人をたたりは押せり 法 分 貴

法と入のりし返向多し法り 法 一 飛

經木流 十六日勝州四天土寺の東傍にありは龍井のありけり經木の  
表は法名を志す 龍井のありけり經木のありけり

は仲末を平初傳へ擬して法名を志す  
比るのとあり初傳を修むるあり

法と入のりし返向多し法り 法 一 飛

送 入 澤中宗自・施火焚・門火・火文字の火・を念火・舟形の火  
形法の史記より同今西条山降お寺の山上薪を以て火を志す

を志す書畫凡草のありしを志すは法を傳へし云云所承抄葉の日素  
聖の親と志すを志すを志すは法を傳へし云云所承抄葉の日素

横川葉三草を志すありしを志すは法を傳へし云云所承抄葉の日素  
是よりしるの 凡は月六日葉を伐ふなり 葉火を志すは法を傳へし云云

は法を傳へし云云所承抄葉の日素 是よりしるの 凡は月六日葉を伐ふなり

は法を傳へし云云所承抄葉の日素 是よりしるの 凡は月六日葉を伐ふなり



舟氷の空間よしくは火く丸 心星

雲のきのき村末をまけるちまぐ 粟屋

地藏祭

廿四日壬子六地藏ありしと土量の灯炉を  
まきしありあり

穂屋

廿七日佐の山杖山系は藤の穂より他は穂屋ありあり  
物候をまきしかの穂屋といふは藤の穂のまきしは穂屋を  
扱くるありし藤屋を穂屋を扱くるありし新式穂抄よ云るが  
はくは、諏訪の系のみありあり諏訪の系ハ年中七十五夜ありあり  
一あり

いりく人の穂屋を穂屋穂屋  
ハコテ由儿

来度よりき一巻をまきし穂屋穂屋  
や共

初村ハ神風あり穂屋穂屋  
優く

相撲

相撲の相撲は、いりく人の穂屋を穂屋穂屋  
ハコテ由儿  
来度よりき一巻をまきし穂屋穂屋  
や共  
初村ハ神風あり穂屋穂屋  
優く

二百十日

夕月や二百十日の人 道里 素月  
花海 佳風

瑞の葉もあつらひ 二百十日の春 素月  
山

雪の江や二百十日の春 素月  
山

露

白露・川の露・波の露・池の露

二百十日

霧

霧の海に霧の色・雨の霧・起る霧人・霧雨

草ぬくをまのつたもるる霧の香 枕草

遠の灯の光るやうきやあの中 枕草

舟成るいよきを 霧のわらうとま 枕草

むらさきをこをまきまら 舟の霧 枕草

本もまらふ菴の灯や霧の舟、 枕草

霧の海に霧の色・雨の霧・起る霧人・霧雨

まよめぐるる霧の香もやあの中 枕草

霧の海に霧の色・雨の霧・起る霧人・霧雨

霧の香やふよのされる山つ 枕草

遠の灯や霧の香もあの中 枕草

夕霧や今もまら 霧の香もあの中 枕草

霧の香もまらまら 霧の香もあの中 枕草

いよつとやあまものよふせる 霧の香もあの中 枕草

霧の香もあまものよふせる 霧の香もあの中 枕草

いよつとやあまものよふせる 霧の香もあの中 枕草

霧の香もあまものよふせる 霧の香もあの中 枕草

霧の香もあまものよふせる 霧の香もあの中 枕草

稲妻

残る暑き

残る暑き 浮雲の影地は高く踏暑うれ、 旧友  
さつと降る雨は踏暑の暑うれ、 旧友  
いよつとやあまものよふせる 霧の香もあの中 枕草  
霧の香もあまものよふせる 霧の香もあの中 枕草  
いよつとやあまものよふせる 霧の香もあの中 枕草  
霧の香もあまものよふせる 霧の香もあの中 枕草  
いよつとやあまものよふせる 霧の香もあの中 枕草  
霧の香もあまものよふせる 霧の香もあの中 枕草  
いよつとやあまものよふせる 霧の香もあの中 枕草  
霧の香もあまものよふせる 霧の香もあの中 枕草

朝夕の秋は繁ふ樹若くは子 外

後の冥ふ山のたけの木の樹若くは 風

秋のやうに日暮すあまの暮さうの 上毛 白燕

初 嵐 初 嵐 初 嵐 初 嵐 初 嵐

布さうまうの感懐りそ初嵐はし 永年

初嵐若のやう集の何そ秋あり 下丹 麓

博くきく籍の秋若くは神嵐、 庭

内言うらなうも身よ入をいあは ぬ空

身よ入石山の赤毛海の暮 素佳

身よ入や表のあま秋若くはのち 一字

身よ入むらさきあまやうあはれ 怪風

身よ入や表のあま秋若くはのち 一字

冷 ヒヤ、カ

あまのく・しやのき・しやくと蟹をふまへてしう寐あれと  
しう寐あれとあまのく・しやくと蟹をふまへてしう寐あれと

思ひ懐りしあまのく・しやくと蟹をふまへてしう寐あれと  
とん得反歌へ入せしう寐あれとあまのく・しやくと蟹をふまへてしう寐あれと  
子よあまのく・しやくと蟹をふまへてしう寐あれと  
穿壁のよとのさうちあまのく・しやくと蟹をふまへてしう寐あれと  
必やうとあまのく・しやくと蟹をふまへてしう寐あれと

あまのく・しやくと蟹をふまへてしう寐あれと 身左

あまのく・しやくと蟹をふまへてしう寐あれと 巢次

初涼の隙子を過す庭の隅に  
ヒキ陸兩

山吹の隙子を過す庭の隅に  
ヒキ陸兩

初涼之

【箋】初涼の隙子を過す庭の隅に  
ヒキ陸兩

扇あり

扇あり

扇置

扇置あり

扇置あり

扇置あり

扇置あり

扇置あり

扇置あり

扇置あり

團扇置

團扇置あり

幙の別

幙の別あり

木撞

月

木撞あり

木撞あり

木撞あり

花のよきもの、垣の河津のやぶ木柱 糸 梅通

花のよきもの、初冬のさくら木柱 垣 蓮 洲

花のよきもの、おの垣の木柱うら 唾 風

草花 思ふよきものはあしし叶のそ トモ 文意

花のよきもの、おの垣の木のち トサ 蒼水

花のよきもの、おの垣の木のち 山 子

花のよきもの、おの垣の木のち 山 子

花のよきもの、おの垣の木のち 山 子

花のよきもの、おの垣の木のち 山 子

女郎花 固 花のよきもの、おの垣の木のち 山 子

花のよきもの、おの垣の木のち 山 子

花のよきもの、おの垣の木のち 山 子

花のよきもの、おの垣の木のち 山 子

花のよきもの、おの垣の木のち 山 子

花のよきもの、おの垣の木のち 山 子

花のよきもの、おの垣の木のち 山 子

花のよきもの、おの垣の木のち 山 子



茶花

男郎花

蒲白をあるを修はすはあへしと云ふ又あはれとあはれ  
そよびたるを白きあるをくささくみあはれと云ふゆいへり

はつらひ名の世なりき花や男へ一 葎葉子  
伸ぬあまの風情をせうをいへり 一 竹

余の竹はまのしるしをいへり 一 葎葉子 一 葎

伸ぬあまのしるしをいへり 一 葎葉子 一 葎

ほろりと葎葉をいへり 一 葎葉子 一 葎

あまのしるしをいへり 一 葎葉子 一 葎

あまのしるしをいへり 一 葎葉子 一 葎

あまのしるしをいへり 一 葎葉子 一 葎

朝顔

素牛を

あまのしるしをいへり 一 葎葉子 一 葎

あまのしるしをいへり 一 葎葉子 一 葎

あまのしるしをいへり 一 葎葉子 一 葎

あまのしるしをいへり 一 葎葉子 一 葎

あまのしるしをいへり 一 葎葉子 一 葎

あまのしるしをいへり 一 葎葉子 一 葎

あまのしるしをいへり 一 葎葉子 一 葎

あまのしるしをいへり 一 葎葉子 一 葎

あまのしるしをいへり 一 葎葉子 一 葎







相撲草

冬あけ種あり生種の葉を熟さすのあとく踏ん  
むしひく人あそをとお引く踏ん——鬼臺の草  
殿し——種ハあそをとお引く踏ん——鬼臺の草  
付て秋草とするをあらん

朝夕の露をおもや角力叶 ハコタテ 徐蓮

星雲のうらうらみ トサト 外

蕃椒

組葉の風を早くせのまきひき、庭を

おくをの露をちのくや角力叶、是月

辛さうにあらぬ 葉葉子

秋風ともよのしして庭のらし の蒲

花うらむををまらや蕃椒 葉葉

暑くし日敷をまぬ唐辛子 トヤ 梅裡

赤くむくすの何く、庭のらし ト 外

秋のくくゆの 留や唐辛子 種 好

赤くても何の露をのを唐辛子 翁





蓮の葉は花やあき又うき日紅 ヒメ 休登

すももはみやや トサ 外

蓮の葉は花やのまけ トサ 外

蓮の葉は花 トサ 外

蓮の葉は花 トサ 外

蓮の葉は花 トサ 外

蓮の葉は花 トサ 外

蓮の葉は花 トサ 外

蓮の葉は花 トサ 外

蓮葉花

系瓜

瓢

挑ノ實

木瓜実

蜀漆花

槐ノ花

早田

室

是米種を切く 粟とて 精氣地へ何れ地何れくうなるか  
成長の早しきと命 ちきをむらんのちや見せしめふさ  
ハ種を最長を命を命くひよ玉を命くひよ米種を最長を命くひよ  
うりうむらう云水空あり 廣くあり

種くううつわく室の早せふゆの形 トモ 思来

ゆき何うや室の早せふゆの形 トモ 思来

種くうううむらもやうの形 トモ 思来

稻の花









カサキ

子の戸にいと飛入り蝶りうへ 采美

かろきや若ふ道たゞ蝶の上 古弘屋

蝶の若くは月やう折輝う丸、蒼乳

居てもうの字もまゝ一りう茶豆虫 下毛 一龜

隣りのう字のらんちりうの虫 下サ 玉清

教ふ一は字けしきうし無虫、是月

於一は字けしきうし無虫、是月

終夜舟をまゝせはくはる日虫 是月

無虫月のくまきくまうり危、是月

茶豆虫  
曹虫

蠟 螂

卵より生る

蠟螂をうつろくましく筆先 京郎

いふまゝの身もまゝ志うり物も若 唯風

蠟螂のむしをよむ物もむしむら 種如

いふまゝの身もまゝ志うり物も若 唯風

藻 住虫

贈 我のうらな難ありなくともは秋あり 園 藻のうらな難ありなくともは秋あり 園 藻のうらな難ありなくともは秋あり 園

雲の舟藻よあゝ雲をたうりて 文種

藻の虫は若くはむしむらむら 庭を

藤の竹の葉のつらさるる 寄る乳 新月子

藤の竹の葉のつらさるる 寄る乳 懐父

藤の竹の葉のつらさるる 寄る乳 宣納

クダマキ  
管巻虫

【箋】江東の徳ノイトと云虫也。又ウイトンと云くはしり  
藤よぬり中ありを汁着く。鹿よぬり又あき物あり  
帷帳の美あり舟元の時候夜着くはくく中あき紡車をま  
くりきく。冥年の徳もまをる。又アイトヨと云くはしり

くくく形や 形ちうりもの 相友

夏やきや 灯りや 寄る乳 近うり 佳良

稻 舂

一名舂屋。冥年の徳バツタをてまきく虫くくち御くく  
きく首は寄り首のくくち舂屋の鳥帽子をまきくくく  
舂を掛くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
江東の鬼壺おをまきくくくくくくくくくくくくくくくく

のくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
稲つきくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

稲舂や 飛ちくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく 佳良

稲つきや 飛ちくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく 高香

虫あくや 舂屋の助の月夜に 佳良

虫あくや 舂屋の助の月夜に 佳良

思ふかのあくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく 東波田

あくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく 素月

虫の痛意虫の用もあくくくくくくくくくくくくくくくく 高香

おまきり 舂屋のきくくくくくくくくくくくくくくくく 高香

虫



をひらきしるるもあや虫送り 菜史

川沿り田の虫送りさきさきこれ 文種

炬をぬけ田の虫あくる道 一五

ちの虫もたなもさきさき虫送り 月昇

ふら白をさきさき後やしらゆ 怪風

と蛇をさきさき海に蛇割ふ 玉堂

なまをさきさき表さきさきみらさく 種好

あしう見たり月や蛇割の延きさき 山雪

鯿ニイラ

鱗は中々の尾小しう解はゆる魚あり味はあつう  
下界あり三四尺のものを九州浦より多く出せり

増物ありて二葉大板よりありて

旅しつゝの徳を鯿の味もさる 飛騨

慶暑ノ節 七月の中あり

鷹鳥ヲ祭

鷹を祭るを祭る鷹の候七月の廿あり注しを鷹を  
を喰ふんと欲するは鷹を祭るを祭る人の言  
ふ時ありて此代名を鷹の人の言を祭るは鷹を祭る  
用て祭るを祭るは鷹の言を祭るは鷹を祭る

鷹を祭るを祭るは鷹の言を祭るは鷹を祭る

鳥屋出ノ鷹

鷹を祭るを祭るは鷹の言を祭るは鷹を祭る

松風よりありて鷹の言を祭るは鷹を祭る

松風よりありて鷹の言を祭るは鷹を祭る





とよ唐をく  
たのこも云り

糖ふきの味もやたつく表のうけ 葉糖子

糖の上手よのせも木陰のうけ 葉糖子

とよの尻目よりや神の毒 呂ん

糖のや入りをも多て敷然うけ 雪約

はとひのまより大あまもや推る本 古棠

糖ふきの味もやたつく表のうけ 一匙

糖のや推るも自然 涼る 笠 卜外

無きや先と祖も言ふ 張走あり 祐く

燒 米

燒米や岩のみ合符とつ法のく 米糖

やき米や米のあまの味もる 逢連 文里

燒米や糖のあま此長をれり 下サ 色月

やき米や糖の味もるをてをてを 米有

燒米や人の味の味も秋をりる 赤 味月

寐轉る足も重なりぬ秋の空 公成

板あくや秋の味もるを 空の色 正吉 丸像

足ゆく世の樹のらまもや 秋のをら 尺 麦香

秋ノ日

秋の自然もまよりまより入江の乳 上毛 澄水

秋ノ空





竹ノ春

竹ノ春は白竹ハ月を以て  
春と云ふ也

春の仲ハ日なりと志重は竹の春

甘茶

又春ハ輝居好く竹の春

素山

輝居ハ春ハ竹の春

月星

又春ハ輝居好く竹の春

上サ  
五美

又春ハ輝居好く竹の春

一説

白露ノ節

八月の節

天中ノ節

八月一日あり七月晦日生業の方の本を伐りて炭に  
焼く八月一日天中節春は白舌隨音減と云ふ門は  
押せ火強盗病口舌の災をすめり

拾世 あり

水村祭

一日二日あり  
場の大さ

堰天神祭

三日四日あり  
せりの水

北野祭

四月廿五日あり  
北野を賑はす神事あり

白鬚ノ開帳

五月山門の儀あり

敦賀祭

春は太神城おまぬ祭あり  
仲哀天皇修築八月十日と云ふ

司 召

公十一日定考  
定考あり  
至榮齋を  
侍るあり

何の事も自然とまの事  
目め

不由

目召 鄙よりぬ事  
出さる事

雪 弱

存命よりぬ事  
あり

イツ  
吾友



名月

名月を月・あらしの月・草名月・露月・秋月・月  
 のまなこ・さやけき・小望月十四日を云十五自夜を望月と  
 云ふあり・十五夜の月・五待の月十七夜あり・五待月十八夜・  
 中しまた月十九夜・五夜月・月夜のま上弦下弦の月を云と  
 云ふあり・月のまなこ・月の舟まなこ月を云ふあり・月の舟ま  
 望月を云ふあり・月の船・玉兔名あり月の中は八足の兔と云  
 とあり・月の桂名あり・玉兔月中は三足の桂ありと云  
 ・常娥・嫦娥は世仙女の名あり仙を木をぬきて月の中は  
 のくま・月のまなこを云ふあり・月の名はまなこ・桂男名別とい  
 へば仙人月中は桂男を桂男といへり・月の嵐或人定は入る  
 月つらよ月の根もまなこを云ふありと云ふあり白朧・黒朧・朧  
 月の根もまなこを云ふありと云ふあり・望月・望月・望月の  
 ちりきたも(をいへり)

・夕附日双名・成月夜  
 ・月夜

名月や露をまなこの露葉り 甘草

名月や蟹をむ池の水はいろ 龜得

名月や世の心を離さし酒の破 山古

名月や鶴居の鳥も常中 俵友

名月や鴨鳴をいへる雪の混り、 露考

名月や居まきとあまのり 板株

名月や木まなこをのうま 影 双岳

名月やまなこは白ふ波の毛、 素月

名月や網代いづるまをいづくま 天  
 名月や橋のらむゆの角 橋 上毛 陸 進  
 名月や風はあつらふ裏の山、心星  
 まつ宵や雪風いづるまをいづくま  
 待宵の雨を痛む付ぬきこりり 山 古  
 今日月 けふの月おとさるまの光りけ 芳 州  
 旅家を川岸へまをいづるまをいづくま 龜 得  
 大川を唯のあふりけ 幸ふの月 下サ 三 郎  
 月今宵 志老を肉よりまをいづくまをいづくま 合 露 考

月見 青信をいづるまをいづくまをいづくま ぬ 白  
 月をさる輝屋やあふりけまをいづくま 連 里子  
 大川や雪のり月見のけけけけ ぬ 白  
 義をさるお愛せまをいづくまをいづくま 手 三 郎  
 いづれをいづくまをいづくまをいづくま 拙 誠  
 ちをいづくまをいづくまをいづくまをいづくま 山 子  
 はをいづくまをいづくまをいづくまをいづくま 芳 州  
 海をいづくまをいづくまをいづくまをいづくま 下サ 三 郎  
 種をいづくまをいづくまをいづくまをいづくま 露 考







つりたりの草よ  
おみか

龍田姫

貞徳云秋の色を降出まを造化の神とあり  
さなはと神徳よとせん

目うはりの山は龍一や龍田姫

イセ 梅並

鶯のうらねむをいしだつしめ

双岳

秋の宮

中宮ののりあり  
三つきよき

初紅葉

そふ家の粒を結くし初紅葉

立宇

神ののりあるをえり初紅葉

由係

神垣や杉まのさうの神をえり

以見

芙蓉

風巻木芙蓉あり木葉日本蓮の名ありハカ月をひく  
又夜目を咲き芙蓉あり長く大荷の葉あり

宮より上り咲きをのさき芙蓉分

十コヤ 破雨

二の花の記念し秋ふくくし

秋夕 素山

秋冷り冬へつり芙蓉あり

唯想

垣より花や雨の芙蓉あり

台石 洒家

花より居たりし芙蓉あり

上毛 散花

花より居たりし芙蓉あり

イッ 重露

雨より居たりし芙蓉あり

五子 情水

木犀花

木犀の花の云やり花は輝花

由係

蒲萄

木犀やさきものら洗む根の白むき蕉堂  
眼よきぬうち木犀の白むくれ  
寄もとの色よりやのるゆき  
堀内よをききする 柳の蒲萄小 下サ  
菓飲

紫葛 エヒカウラ

和葉ふくもぬき変をむきを戻又一種性  
いふものなり林性の常く生をつる葉を戻やうよ  
みくもきしものあり 生実ふくも  
園くを葉ふくも  
秋ふくもぬき 柳根やえむから 小  
はる肥ふ葉のまうれ花をむき 素心

東

葉の陰よりうき熟し葉の形 如白  
虫さしむききく毒むあつめ 小  
仙鴨のつき叶と和を月葉の常あり万のをハ  
朝日影よをききを月葉のまけ八月葉とのあり

露草

露州や月葉持を 如くもり 古  
花

宇治の花園

花園や宇治を芳の志花を了 雲約

花野

咲りたる花をたけしの花野 不尼  
ふくもる日斜よききや志の原 テハ  
思ふまに 下サ 庭を

葛

ついでつら

さくさく日のおもひつらむを建つれ 雲岳  
旅ふのら旅の糸もすけを種枝え 仙月

岨の草むすのたをりりやむしりま 連理子

芒

あつたき・糸蔦・たぐさき・つらさき  
尾を・蔦羽をき

布さくはあまをせーはさき 尋美

いふくはをさう布をよむすき 香芸

沙魚釣の居るけけ川一芒うら 唯風

少いね風情の多きさきさ 露白

紫

樹の穂よさのまつりさきさきや 聖川

しよのさきさきをささふさうれ 月雄

海まのいさあまをさささ 酒家

度きおまは一日をさささ 新々

種さきや方角志をぬ風のま 下甘 吾玩

さくはく通をぬ岸の尾をさ 雲山

空睡ささきをさこれのさう尾うれ 下六 雲山

荳

川荳と聖のまじし尾のいと 万枝子

獲まやたや尾をさささ 戦ささ 乐山

刈草のまじりや花よりわきまを  
心

つる草や一やりの秋の  
花月

花紫

〔蘭〕三月雨をよとつる花よ草紫あつるゆゑよ秋と云ふ  
草紫の種を説く人あり云此州秋種を  
ハ草ををいかにまじりたるは秋を候と云り苗字を尺  
ノ草葉ハまじりたるは秋と云り苗字を尺  
中ノ秋及い草葉のまじりありハ長草ありまじりを  
草ノ葉をまじりたるは秋と云り苗字を尺

此草と云りや草の  
葉種

壇持花

らんく秋の草を  
古 葉

紫苑

をよの草くき

枝草葉よをよの草くき  
葉

らんく秋の草を  
上毛 心星

らんく秋の草を  
全 素心

らんく秋の草を  
全 素心

らんく秋の草を  
全 素心

らんく秋の草を  
全 素心

らんく秋の草を  
全 素心

らんく秋の草を  
全 素心

らんく秋の草を  
全 素心

らんく秋の草を  
全 素心

生草・生草葉・生草葉・色を  
草の根をいふ

温草の根をいふ  
草の根をいふ

山草の根をいふ  
草の根をいふ

つる草の根をいふ  
草の根をいふ

昔の心を懐かたもそのよきをうけり 金 龍友

遠く草のしるべや秋のつゆのたけ 下毛 未世

草の色付 引きぬぬあやや叶のまはやく種 高島

花 檀 見えのりの物とありあるを極うれ 佳吉

野 菊 んあくお 控えのり種 あの子

鳳仙花 ぬきよとてふもあつして風仙花 為山

雞頭花 葉をよりの種 秋のよみのさめ 古 窓松

金剛草 コマツナギ 秋のよりの山草よまを種 あつち 菊 あつち

根あきく中々やのまをあつち あつち 龍科

水引の花 水引のまを遠く あつち 龍科

縷 ハ 紅 コウ 水引のまを遠く あつち 龍科

鷹来紅 一説うまつりのまを向く あつち 龍科

一葉をよむまを あつち 龍科

あふの赤も赤 あつち 龍科

あふの赤も赤 あつち 龍科

あふの赤も赤 あつち 龍科

あふの赤も赤 あつち 龍科







木綿取

刈安やあるの工 俵に底をひき 単似  
梅は是を綿取りの工をせむと云ふ也梅の皮を  
四つに分けて白綿を抽出せしむる是を梅皮といふ也

蓋障

ひらね世ぬ縁小交りて木綿取 比多陸留  
孫の手を引てせむる也木綿取 下サ 芝蕙

鬼灯 ホソキ

孫を也燭一の如きぬ女子蓮、庭を  
鬼灯や葉障りぬの事うたぐ 連理子  
足踏しむるつきやてぬまなり 金橋

若菘

臣をを月よすの事也菘 葵史  
和もいふ世後入るるここの菘 山雪

菜種蒔

思障の春は、つりぬあかたをぬ 小葉  
ふゆくしりをもや新りの日の菘 下サ 玉信  
吹のらの果も白くや花もをぬ 比多 素月

中入月もさく異一 菜種蒔 田左

隣りて事を付らぬや 菜種蒔 方永

徳のり一やするをせむ大根蒔 小葉 里水

大根蒔

間引菜

間引菜の蒔は定ぬる事なり 表白  
衣打 まゐりて・回手打・志をうつ



稻雀

鳴

鳥の鳴るは芽や鳴うらら 常鳴

返しや運し先心遠田を稲雀 ありめ

様し鳴をききりぬ稲雀は先 上 五英

鳴の羽りき・川系鳴・曉鳴・不鳴・鳴りき綱

是分の名先ききり鳴の鳥 善陽

鳴るややきくはつやい善陽 飛橋

鳴るややきくはつやい善陽 翠岳

山の蟬を風のゆりや鳴の鳥 虫像

鳴るや山のゆりや鳴の鳥 三 梅裡

本を鳴る風をききり鳴の鳥 六 長雪

大川や水田へききり鳴の鳥 青圃

灯の光をききり鳴の鳥 鹿亭

鳴るややきくはつやい善陽の利 下 山 蒼

新布し先ききり鳴の鳥 山 古

鳴るややきくはつやい善陽の鳥 鹿 是

玄鳥帰

秋社より鳴る鳥

乙子より鳴る鳥は先ききり鹿 古 古節

玄鳥の鳴るは先ききり鳥 鹿 風

雁

雁・白鳥・海鳥・羨鳥

さきさきのしほしほや雨夜のそとれ鳥  
 雁のかきんあしー空よほしく鳥  
 渚あかりさよのころ白鳥のさき  
 志純あのおよそを河の渚あさき、  
 寝る耳よまをさしてあそび海鳥  
 近き田よありそをさかー雲の鳥、  
 空あつしよゆいそをさかー白の雁  
ヒタチ 双武

菱喰

小鳥渡

月のねとさうりあひる渚のさき  
 菱喰のいきりさきとく一夜白鳥  
 日暮りつよといふをほして海鳥  
 渚の事ー空や田畑の多き里  
 叶のさきのしらをわさし海鳥  
 来り宿よいねを越あそび海鳥  
 空も空あふー折るそを海鳥  
 岸あつそ友よの空を海鳥  
 袖はほしそそきもそとつ海鳥  
ヒタチ 双武  
カサレ 柳株  
上毛 一鳥  
テハ 橋本  
子守 竹文  
 三郎  
 関山



山雀のちやくや日のさけ 園このと 秀子子

山雀のちやくや日のさけ 園このと 一子

山雀のちやくや日のさけ 園このと 車

山雀のちやくや日のさけ 園このと 株堂

山雀のちやくや日のさけ 園このと 山社

山雀のちやくや日のさけ 園このと 秀子子

山雀のちやくや日のさけ 園このと 傳

山雀のちやくや日のさけ 園このと 龜友

山雀のちやくや日のさけ 園このと ぎくめ

小雀

四十雀

連雀

鶉

瑠璃鳥

目白

啄木鳥

鶴 鳩

瑠璃鳥のちやくや日のさけ 園このと 梅葉子

目白のちやくや日のさけ 園このと 木葉

啄木鳥のちやくや日のさけ 園このと 秀子子

啄木鳥のちやくや日のさけ 園このと 名つゝと屋の

啄木鳥のちやくや日のさけ 園このと 士致

啄木鳥のちやくや日のさけ 園このと 庭を

啄木鳥のちやくや日のさけ 園このと 唯風

鶴のちやくや日のさけ 園このと 梅葉

鷓鴣

世にせむの鳥屋の風をさす友と飛  
時法曰俗考一名鷓鴣一名鷓鴣といふなり

鷓鴣

鷓鴣の草花の馬をさす鳥をさす鳥

鷓鴣の草花の馬をさす鳥をさす鳥

鷓鴣の草花の馬をさす鳥をさす鳥

鷓鴣の草花の馬をさす鳥をさす鳥

鷓鴣草莖

鷓鴣の草花の馬をさす鳥をさす鳥

鷓鴣の草花の馬をさす鳥をさす鳥

鷓鴣の草花の馬をさす鳥をさす鳥

鷓鴣の草花の馬をさす鳥をさす鳥

鷓鴣の草花

鷓鴣の草花の馬をさす鳥をさす鳥

鷓鴣の草花の馬をさす鳥をさす鳥

鷓鴣の草花の馬をさす鳥をさす鳥

鷓鴣の草花の馬をさす鳥をさす鳥

小鷹

小鷹の草花の馬をさす鳥をさす鳥

小鷹の草花の馬をさす鳥をさす鳥

鷓鴣

鷓鴣の草花の馬をさす鳥をさす鳥

鷓鴣

河鹿

【評】本宿遊傳云河鹿ハ何處の俗稱ナシクハ能藩志流の云  
ルルハ一ノコトナラシムルモトニシテ其ノ内ハ又魚の  
化生する所の魚を魚と云ふに似たり惟のつめふる子にて成る事ハ  
蝦の如くナリ也云々ありナリ山内志流云々田沼志流云々  
河鹿と云ふ河鹿はアノ山内志流云々田沼志流云々  
情あり田沼志流云々水と云々也ハナシテハナシテハナシテ  
だゞくナリト云々ナリ也後ナリ也性有廉ナリ也ナリ也川  
荒といふもやまをいふに似たり云々魚の性も云々流も  
世々云々魚ハ情  
此のよはくナリ也

渾水と渡るものすぬ河鹿也 古梅室

宵月の静あり情あり 中精彼子

木海の満はゆもや情河鹿 六松泉

は荒あり根やぬの角もきやや 下サ 自注

澁 鮎

川をささぬきを押し情河鹿 下毛 一龜  
水着とあそぶことむらうかき 下毛 文起  
物きぬる雨の静を情河鹿 下毛 一龜  
釣人云々河鹿の角もきやや 下毛 一龜  
歌うすぬ崖の角もきや情河鹿 下毛 一龜  
渾船のとくさるも情河鹿 下毛 一龜  
きぬ船の岸を情河鹿 下毛 一龜  
山川や船もあそぶことむらうかき 下毛 一龜  
渾船の角もきやや 下毛 一龜 紫尾



川中もせきまきり 船も出さずり 舟

傍き木のめしつ 不慮や船さし テハ 陸風

ふく風うちつりの付る 鯉さき ハ 河傍

下り築 下 築 下 史 下 史 下 史 下 史

水青の夜ふき 下 築 下 築 下 築 下 築

崩築 下 築 下 築 下 築 下 築

鹿 下 築 下 築 下 築 下 築

行天皇のまき 白麻を志ろ 二世まきと 刈せり 又まきと 二六 鹿 下 築 下 築 下 築 下 築

吹く人のあき ねのちの 鹿の考 其 岳

出た合を 喰ふ 鹿の考 其 岳

鹿の鳴り 月夜を 新木の考 其 岳

里ちりく 鹿の考 其 岳

月の鹿の考 其 岳

一考のいし 鹿の考 其 岳

月代や 鹿の考 其 岳

鹿笛や 鹿の考 其 岳

下りの 鹿の考 其 岳

鹿 笛

初鮭

とせ初鮭や市多尺綱仲男  
海をサリ除く初鮭魚の帯り  
刺根川や流るる水の子鮭の味ハ  
初鮭や切るる水の子鮭の川岸を流る  
川風や鮭とせぬ水の一志きり  
鮭や移るる水の子鮭の味ハ  
鮭の味ハ移るる水の子鮭の味ハ  
初鮭は早う遊し日せくめけ里  
昆色湖の名産なり木多き水のハ三尺小なる冬尺上  
之く鮭の味ハ江鮭とる別湖の鮭なり川鮭

江鮭

味ハ早う遊し日せくめけ里  
下名 富峰  
鮭を入るる水の子鮭の味ハ

味ハ早う遊し日せくめけ里  
有ん

鱈

と名つく二三尺上なる水の味ハ  
味ハ早う遊し日せくめけ里  
味ハ早う遊し日せくめけ里

小鯛列

小鯛列  
鯛  
鯛  
鯛

沙魚

沙魚  
沙魚  
沙魚

野分

暴風八月二吹大風あり

たゞ世約のしりし船を形なり

波臨

毒酒のいせと干上り世分り形

ナホヤ 一信

折ふも毒空を世分り形

上歩 中像

捨去くや世分り形

松 舟 板 圍

初汐

八月二汐のきまなりあり

初汐や善く世分り形

唯風

田を守

田の色つく・田を刈る・稲葉

も形なりや世分り形

文種

田の色付

紙はしくたてる田守のりあり

花酒

色のはく田へ毒くきまなり

初山

田の色めつくや善く風なり

葉像

いらはくや世分の田に昭り

係友

夕風や色つくや田にサリ

一島

稻

初り却り上りきまなり

稲種小 下毛 山古

嵐尾草の一株咲ぬ

市徳

田を新

けしるも世分り形

下リ 以 兄

桂まきり 稲もけしるぬ

沙

落穂

手くううを突入をわめる落穂は 冬水子

乾き田は雀の吐き落穂の事 偶水

雑俣の事う穂とく落穂はれ 冬

種粒しや何ふ是なき事ありし 余和

いりりぬ汁は粒ふおち粒う事 下サ

羽後若く人うてわらふ落穂は 方永

おしのうき人の横竹落穂うれ 魯水

新うぬ方うも眼の行落穂米 子布

八東穂

ヤツカホ 冬くたふきある穂の種あり 又八東子と云

杖の手は八東穂扱一節う形 冬 水

稲進

是をのきりき蒸す人けりき稲葉の雪にして道き 冬

畑らくと日よきる事う 稲むら 孤什

う世しきと月うもるや稲進 思成

落うる日よきる事う 稲むら 冬 文志

茶山子

冬あしき水田よまのけりおめおのうををひやををき出 冬

落あしき水田よまのけりおめおのうををひやををき出 冬

落あしき水田よまのけりおめおのうををひやををき出 冬

落あしき水田よまのけりおめおのうををひやををき出 冬

此の如き小極堂をひく平上同じ木ありて阿流の如き也  
了る後傍に一木ありてくのもありて一増

鳥劫オビ

或もしきまよひしを焚くは 木屋  
乃ちまへのりかやかしのみは 柳屋  
雨風のりたるはやをわたり 隅  
風をまかりたるはやを劫 花  
うき秋の形も入るをわたり 海  
時のあやや極の南の山をわたり 葉  
葉屋

添水

旅人をまきしりて世を流るの如き 高女  
昔も木のこゝろをまよひつる流るは 素月  
あつ所へ出せぬ夢中の流る水は 古棠  
風をまかりたるはやをわたり 貞忠  
あつ所をわたりたるはやをわたり 一弟  
あつ所をわたりたるはやをわたり 指  
木の香は 樹のうらや月の引板、 松友  
山の香はしきまよひたるはやをわたり 一弟  
あつ所をわたりたるはやをわたり 五

引板

あつ所をわたりたるはやをわたり 五

此歌を小徳堂に於て予と阿比志と共く阿比志に  
了るは侍所より此歌をうけりてのよし  
増

建つてゆく 雨の山に雲ありて 不接水

然もしきききよしのしを禁み 村屋

かうまへのいづかかしのまは 柳絮

雨風うらうら 女や春あはれ 隅水

風をきく子なきまのやき劫 花あ

うき秋のねほ入るをわたり 怪樹

時のあやや極めぬるをわたり 葉在

鳥劫 オビシ

跡

添水

旅人をききしりて世を流るるを 妻の女

昔も木のこゝろをよつてる流るる 素月

この所へ出せぬ宿中の流るる水 古棠

風のちるる木はききききききき 貞忠

よすしをちのしつぎに流るる水 一弟

よすしをちのしつぎに流るる水 指妻

木のきき 村うらうらや月の引板、 梅友

山宮やしよよあはれうらうら 下サ 一宮

東をうらうら引板よ交り危ムツ 五宮

引板

美墨て引板のまゝ又とありて 下 清 水  
引板の鳴る方へと居をきおへり、古 棠  
方角の志をぬ 河のわらうの志 下 河 崎  
暮のくるまぢち及や 秋のにおと 下 毛 一 龜  
暮のくるまぢち及や 引板の音、 松 風  
未昔心や日暮の志のゆくまゝ、 未 貴  
昔城よは 暮の繩や 宮の内 古 友 州  
川 節とつ 河のわらうの志をきおへり、 北 枝  
引板よは 松のうきくまゝとくれ 下 丹 芝 蕙

鳴子

燒帛

燒帛や乃も志とろし 州のる 下 全 風  
やきまゝや 風ハ 崎より 吹あらし 下 丹 花 月  
燒帛や 風上ハ 四もをともはし、 下 外  
戸を志あゝとく ねまをん 秋のる 已 限  
暮のくるまぢち及や 秋のにおと 下 毛 一 龜  
やきまゝや 再をきおへり 秋のる 下 毛 一 龜  
枯枝よは 志とろし 秋のる 下 毛 一 龜  
遊ああら 海のうきくまゝとくれ 下 毛 一 龜  
木この 遠く 風をともく 秋のる 下 毛 一 龜

秋の雨

秋の暮

下 毛 一 龜  
下 毛 一 龜  
下 毛 一 龜  
下 毛 一 龜  
下 毛 一 龜  
下 毛 一 龜  
下 毛 一 龜  
下 毛 一 龜

物望ぬ人掛ひりり、けきの音 古乙中

秋末のこころをんや秋めえき、ハ岩白

少老よこころをりり、秋の音 古ラ 梅新

穠望ぬまゝにちる、秋のえき 古シ 仙友

後世、ハ老の音あり、けきの音 古コ 葉居

上座、旅人ぞりり、秋のえき 古ハ 清民

季をりり、けきの音あり、秋の音 古ニ 孝候

秋の音月ハ木の音、やりり、音 古ト 為山

秋の雨

九月

建長元年の辰、音志上、同成を減あり、時時衰減を云あり

○長月を夜街、キ、ハ、夜長月といふ、今異、一、ハ、九月、一、

○長月・紅葉月・小田刈月・麻呂月・栢の秋・孝秋

○喜村・玄月・葉月・孝秋・晚秋  
米末の秋といふ葉出のゆゑあり、又米の秋といふ、りり、米深

月といふ、喜村ハ九月の律あり、喜村ハ、喜村といふ、

下サ 葉居  
葉居の音、ハ、九月、ハ、義堂

下色 一 花  
空をりりして雨の音、九月、ハ、

水音の音、ハ、九月、ハ、及

花音の音、ハ、九月、ハ、



長月

長月の秋や少松も若くは是れ

七月の空に空をなやほしけれ 文種

あつた月や露を風を風を 花

長月や甲上人の若くは是れ 花

七月や少松若くは是れ 花

あつた月や露を風を風を 花

御燈

因之日あり三月のめぐりかたし

不堪田の奏

園七日或る五日出せし法必の田の換色忠より

あつた月や露を風を風を

不堪田奏せぬ事の時 秋之

桂の宮相撲

八月ありきの宮を名前の水西の洞法の

泉涌寺舍利會

八月世々入滅志あり 対連・疾鬼・鬼

之りけるを舍利會の法を因に茶菓の味をかくる

重陽宴

重九・茶酒・茶菓の業・茶菓の宴行くあり酒

九月の秋あり九月九日あり重九も重陽もなり

酒を飲ふあり茶菓の味を因に茶菓の味をかくる

重九もなり九月九日あり重九も重陽もなり

温酒

菊

温酒の酒は平温にして飲むに佳し

温酒の酒は土平の酒にして飲むに佳し

菊の着世綿

綿

菊の着世綿は世に古くは月夜に菊の香あり

菊の着世綿は世に古くは月夜に菊の香あり

菊の着世綿は世に古くは月夜に菊の香あり

秋の雜

秋の雜の酒は世に古くは月夜に菊の香あり

秋の雜の酒は世に古くは月夜に菊の香あり

秋の雜の酒は世に古くは月夜に菊の香あり

秋の雜の酒は世に古くは月夜に菊の香あり

秋の雜の酒は世に古くは月夜に菊の香あり

菊酒

菊

菊酒の酒は平温にして飲むに佳し

菊酒の酒は土平の酒にして飲むに佳し

菊酒の酒は世に古くは月夜に菊の香あり

菊酒の酒は世に古くは月夜に菊の香あり

菊酒の酒は世に古くは月夜に菊の香あり

菊酒の酒は世に古くは月夜に菊の香あり

菊酒の酒は世に古くは月夜に菊の香あり

菊酒の酒は世に古くは月夜に菊の香あり

菊酒の酒は世に古くは月夜に菊の香あり

菊酒の酒は世に古くは月夜に菊の香あり

菊酒の酒は世に古くは月夜に菊の香あり

菊酒の酒は世に古くは月夜に菊の香あり

菊酒の酒は世に古くは月夜に菊の香あり

以上

綿

菊酒の酒は世に古くは月夜に菊の香あり

海贏廻

海贏廻 閏紀より曰は月九日兎幸小名を以たるのころを寅月  
紀をとりて 閏紀より入也 或ハはをま 阿波を 穀  
内より元つて中力を助命各徳をこころをいかにまをさるる  
よきしを 煮肉よ 投入せしを 懸懸せし 中力つよき者ハ  
よき者もさるるあり 出せしは 後夜をいかに 小まをさる  
をい 懸懸と 懸懸を 懸懸を 懸懸を 懸懸を 懸懸を 懸懸を

子の中を 懸懸を 懸懸を 懸懸を 懸懸を 懸懸を 懸懸を

葉 雅

穀太のちのころをいかに 海贏廻

如 白

醍醐祭 九月能行

御香の官祭 同日伏見より行ふ  
神印后を送る

鞍馬祭 同日 貴布祢祭・生玉 同日  
大坂

四官祭 十日 下鳥羽祭 十日

例幣 十一日 閏行の勢の大神 言へ四幣をたすせふあり  
毎年の例の幣のたすは 例幣と申すなり 一神禮官へ

例幣 十一日 閏行の勢の大神 言へ四幣をたすせふあり  
毎年の例の幣のたすは 例幣と申すなり 一神禮官へ  
幣を法にたす 出便のし御馬やうりあり 老のたす幣の例  
東羅院の例あり 始るある大神より 例幣の例  
人 例幣あり 例幣あり 年内をいかに

例幣や 例幣や 例幣や 例幣や 例幣や 例幣や 例幣や

例幣や 例幣や 例幣や 例幣や 例幣や 例幣や 例幣や

御難餅 十二日 蓮上人 法堂を離り 破るの事を 拙ま付  
ぬり 餅の口より 餅をたすを 餅をたすを 餅をたすを 餅をたすを

例幣や 例幣や 例幣や 例幣や 例幣や 例幣や 例幣や

例幣や 例幣や 例幣や 例幣や 例幣や 例幣や 例幣や

不二丸

田のふるも此ききも西難餅 心  
西難餅たのいも利益のふる危 心

住吉相撲會 十三日

住吉の市 同日宝の市と云是あり神喜をうつきつて神喜  
傳来し神宝をとり重つては法あり宝體を

たき侍子をあそびはるあり侍り  
井を買ひてあそぶ侍り

宝の市 河やよくと宝の市此宝をとり 下サ 宝船

舛市 舛買て分別のたる月見つれ 箱

舛市 舛市はゆるある世を流りしと 茶枝子

舛市 舛市はゆるある人少ふ 菓後

親はしり買てはる危市の舛 花洞

舛市 舛市はゆるある侍 上毛 華外

白河祭 同日

後の名月 豆名月・粟名月・ゆき名の月・月の名  
皆十三夜の名あり

榎つるぬんくしり後の月 古 墓古

以ちやよとち積ちをて後の月 香 香破

衣まゆよとち木の葉や後の月 たよ 女

後の月世の中ききくぬんく 法 法民

次の同此侍りしりて後の月 孝 孝雨

粟をわくすてくよまをさるる後の月 香汝  
 せせるる空に風吹りのちの月 上毛 文船  
 あきつゆのよまをわく 石船月 下毛 子喜  
 水よりつるる空をわく 浪の月 梅圃  
 お空の月後よりくち 後の月 庭花  
 成結るる月 春の月 五英  
 人よりくち空をわく 後の月 吾川  
 海よりくち空をわく 後の月 葉屋  
 見きつゆのつるる空をわく 後の月 常陸

十三夜

阿つそのよまをわく 十三夜 古 養古  
 海よりくち空をわく 十三夜 若お  
 をわく空の指をさる 十三夜 双岳  
 海よりくち空をわく 十三夜 若川

天王寺一乗會

十四日 今八  
 十五日 岩倉祭 北山

小倉祭

十五日 勸學會 同日三月よ

粟田口祭

同日 是向川橋の東  
 一宮祭 同日

神田明神祭

神田社に大に婁命饗坐ありて存お門にひて怒  
 長坐ありてふりて 延文のちのち一返上人三代真教坊  
 神田の社に今世にありて 延文のちのち一返上人三代真教坊  
 延文のちのち一返上人三代真教坊  
 延文のちのち一返上人三代真教坊

未春の御神に奉り神皇上流の地をこころし民子の所を神皇  
の御心より神皇の御心より神皇の御心より神皇の御心より  
神皇の御心より神皇の御心より神皇の御心より神皇の御心より

人あつては神皇の御心より神皇の御心より神皇の御心より  
神皇の御心より神皇の御心より神皇の御心より神皇の御心より

伊勢御遷宮 十六日

伊勢御遷宮 十六日

伊勢御遷宮 十六日

度會新嘗會 十六日

岡崎祭 同日 東山よ 山口祭 中巳午 周防

呉服祭

同日也何也を祭六十七日あり津の香田より行り  
天皇の御宇に神皇の御心より神皇の御心より神皇の御心より  
神皇の御心より神皇の御心より神皇の御心より神皇の御心より

穴織祭

山よあつては神皇の御心より神皇の御心より神皇の御心より  
神皇の御心より神皇の御心より神皇の御心より神皇の御心より

婆利女祭

同日也何也を祭六十七日あり津の香田より行り  
天皇の御宇に神皇の御心より神皇の御心より神皇の御心より  
神皇の御心より神皇の御心より神皇の御心より神皇の御心より

旅夷祭

同日也何也を祭六十七日あり津の香田より行り  
天皇の御宇に神皇の御心より神皇の御心より神皇の御心より  
神皇の御心より神皇の御心より神皇の御心より神皇の御心より

海のなきふもまらうう旅 妻 祀之

八幡花の頭ハヤハ 女日つくり

上南寺祭上南寺 同日山城寺相替田子

天王寺結縁灌頂天王寺 同日・太祭祭十二日半まらう

淀祭サニ田・天満鋪流馬ヤフサメ 廿五日・木幡祭コハタ 廿四日山城

鹿谷祭同日 洛東報國寺・逆髪祭サカガミ 廿四日江あこ兵庫

北山祭廿七日 六所の社・座摩祭サカガミ 廿二日橋本

鳴瀧祭廿八日 洛西仁利寺鳴瀧寺・津村祭廿七日 大坂津村

檀寺節 屋敷

撰シラシ 虫シラシ 取上の道通とと取上人の御ま通しとと

野の宮比別注 若皇女を依何勢を神家へ祭まうまふ依て二

の回地は依皇女を建てて先皇女との皇女は依秋祭目をつと祭るのち

神のこまらる時存もまらぬいあまらる 古 護物

寒霜の節 九月の節あり

雀為蛤月 長成月の候を記す雀蛤とある雨物他一と

らつるものせむ世や蛤とある 雀 名由

蛤とあるとふいそぬぬとある 依反

蛤とあるとある雀のあせし 雀 重納

菊

菊合・百葉・程々葉・大白・碎揚花・菊叶・金目世  
大淑多・乙女花・菊の葉・菊叶・女花・源光子

菊の葉や花の葉をさる夜の庵

菊の香は世の人共法より至 古 菊 左

山風や板戸の風をさる菊のうへ 古 菊 左

見事世とさる菊をさる月の菊 古 菊 左

はちりーの菊をさる菊の葉に 菊 葉 古 菊 左

見事世とさる菊をさる菊の葉 古 菊 左

菊の葉をさる菊をさる菊の葉 古 菊 左

菊の葉

菊の葉をさる菊をさる菊の葉 古 菊 左

菊の葉をさる菊をさる菊の葉 古 菊 左

菊の葉をさる菊をさる菊の葉 古 菊 左

菊の葉をさる菊をさる菊の葉 古 菊 左

菊の葉をさる菊をさる菊の葉 古 菊 左

菊の葉をさる菊をさる菊の葉 古 菊 左

菊の葉をさる菊をさる菊の葉 古 菊 左

菊の葉をさる菊をさる菊の葉 古 菊 左

菊の葉をさる菊をさる菊の葉 古 菊 左

残る菊

十日菊の葉をさる菊の葉をさる菊の葉

菊の葉をさる菊をさる菊の葉 古 菊 左



暎のあつる葉に短き日掃り葉 下サ 蒼水

緑の葉をさきりおつる葉をさきりし ハ 如 水

出づるふり葉をさきりし ハ 不 由

緑の葉をさきりし ハ 不 由

九日小袖 葉をさきりし

小袖をさきりし ハ 不 由

雨傘をさきりし ハ 不 由

霜降の節 九月の中あり

射獣を祭る 月をさきりし

九月の中あり  
射獣を祭る  
九月の中あり

紅葉

紅葉の葉をさきりし ハ 不 由

戸城山

紅葉の葉をさきりし ハ 不 由

紅葉の葉をさきりし ハ 不 由

紅葉の葉をさきりし ハ 不 由

紅葉の葉をさきりし ハ 不 由

藤くまぐ田のまのたるる即葉うれ 東海

即葉をなるとりぬたむち葉 山古

山おろる人のまのたるる即葉うれ 素山

江をのまぐ山や一本のむらむら 重初佳

且散

是の即葉をなるとりぬたむち葉  
かみちるまふしそひの  
ちりあう

思ふて月の光をまの即葉の如く 古 完来

梅紅葉

立止るまふしそひの梅の葉 拙誠

櫻紅葉

櫃紅葉

下町の色うつくしき即葉 上サ 栢翠

柞

柞とつりま月夜の名あうりま 古 恒九

雨と日と柞のまのまのまのまの 其仙

名の木散 柞のまのまのまのまの 葉野

名の木散 柞のまのまのまのまの 葉野

名の木散 柞のまのまのまのまの 葉野

名の木散 柞のまのまのまのまの 葉野

草紅葉

是間下と云ぬ高や草紅葉 今

水色のいしく青し一州をさす也 正言 権 飛

権除く地もさす也と云ふ也 下并 孫 賦

市中より世地もさす也 蓮 海

宗より水の愁しき世もさす也 正 義 正

水もさす世もさす也 州のうけ 素 原

檀

檀山より採る木也紫の槐より採る秋よく紅葉 貴殿輔の歌に若のむ世若くもさす也いろもり先

榎

ウキキノノキ

青き中より葉の色つぼし榎の葉 嘉弘

楓

青きといふも

真より入る時さすも青き楓の葉 善 師

色不變松

色不變ぬいろよりの松や庭の松 ムツ 葉 史

いろ不變ぬ松や庭の松 下サ 花 月

色不變ぬ松や庭の松 素 心

色不變ぬ松や庭の松 甘 茶

色不變ぬ松や庭の松 心 皇

色不變ぬ松や庭の松 古 一 具

白膠木

スガノキ

柿紅葉

梅紅葉

銀杏 イノウエ

ぎんなん

雨の中へ花もさきく梅をさき 長蕉堂

銀杏や葉も花をさき 長蕉堂

木の實

木を植ふる城を木の実よと板、柳佳

榎の實

板の實ある榎多の羽をたおし 翁

栗

実も花の付るを榎 出月

栗

栗栗・さく栗・はり栗  
ちきり・焼栗

襦袢と袖もき、粗の思ひく 古

いのかげや 嵐雪

栗

葉栗や 性路

栗

お栗や 下サ 三郎

栗

風や 下毛 一兔

栗

権の 善路

柿

木柿・柿柿・木柿・熟柿・甘柿・葉柿  
あやのき・うきつき

柿よ 分文種

山 在

葉 楓

ら 子布

菜ダ黄ミ

蜜柑

金の柑

久年母

柚子

抽魚

柿の皮の付を必を同ふ小おちき  
此もちやや島もこのぬ柿とくら  
下 吉

近の甲の葉のうくせのせも蜜柑の  
下 乙 郎

金柑や色付の葉も赤ならずき  
素人

雲州橘 佛子柑  
下 吉

抽の色やさきとりの根と根のせ  
下 吉 民

根信のせもさうのまき抽魚  
下 吉 岳

抽味噌

料のアア字をさうきく抽味噌考  
下 吉 子

魚のせも後さうつりゆき考  
下 吉 郎

精進の籠籠よ終る抽とを  
下 吉 晨 風

木瓜の實

木瓜の實や嵐も終るぬ教のり  
下 吉 松 曉

楡マ栲メ

しんやるのせらろ  
とも云々

は種葉邦よりとてとて一葉師は多  
下 吉 垂子のり  
か世伊とと云葉の是よ砂種やと安を和しと雲と

おちのちやさうのり  
下 吉 雲 英

梅檀の實 比ちろや梅檀の實より多しの佳く 上カ 雨相

梅檀や實の佳なり也 手 優く

椿の實 庭掃ひは赤中より椿の實 了く

椿の實 庭掃ひは赤中より椿の實 了く

杲李の實 榎檀ありを名をいんおよぬるも イッ 穀

柘榴 多子とくちあり・紫葉栗

栗 榎檀ありを名をいんおよぬるも イッ 穀

胡桃 比ちろや梅檀の實より多しの佳く 上カ 雨相

梨子 比ちろや梅檀の實より多しの佳く 上カ 雨相

籽の實 比ちろや梅檀の實より多しの佳く 上カ 雨相

本名の標は世の人能くも市うれ 箱

比ちろや梅檀の實より多しの佳く 箱

籽の實は比ちろや梅檀の實より多しの佳く 箱

比ちろや梅檀の實より多しの佳く 箱

本 葉中より多し 関中ハ素の地あり故に字素は以て

比ちろや梅檀の實より多しの佳く 箱

比ちろや梅檀の實より多しの佳く 箱

團 イナナ 標 イナナ 栗 イナナ

イッ 五 尺

水木

・枳殼・瞿子桐實

槿

掃ふせをてはる 槿の葉は白く丸

佳名

新松子

冬は物よそくそらそり物知り

不二丸

実の落る秋よのさほし新ちる

素心

瓢樹

形ちるへをさきむの人の實入の葉

山古

椋の實

むくの葉を是もまじりの南の葉

定松子

皂角子

皂角子の葉や木を遊ふもふし

佳名

南天實

南天や赤うらふる花の志あり

文里

白毛の葉や花のりも花しき

野山の色

お夕や秋ふゆの向きの花

上井 赤松

野山の錦

錦と叶は際とる 世をうり形

下井 壽山

空まをうりつる世山のりきうれ

上野 後調

里のそふ世のり錦の生さうり

上野 林内

あまのり水もの葉をうり世の錦

管成

未枯

多葉そとを付る

未のそとや二るも 餅くふり山

古 其角

うら枯る候もあつる 未下り形

葉居

未のそとや星玉のりく

九 折 一 表

芒散

冬ノ度中を食す芒ノの如クノ芒

撰考

葱草

日の中ハ秋を食し海ノ中ニ生

素力

芦の穂

芒ノ穂ニ似テ秋ニ生ル

身ノ質ノ人ノ心ノ如ク生

性也

龍膽

和ノ名ニ州ハ思州尾尾ニ生ル其ノ根ハ赤ク葉ハ青ク花ハ紫ク

ムツ 抽出

吾亦紅

和ノ名ニ州ハ思州尾尾ニ生ル其ノ根ハ赤ク葉ハ青ク花ハ紫ク

下サ 以見

和ノ名ニ州ハ思州尾尾ニ生ル其ノ根ハ赤ク葉ハ青ク花ハ紫ク

和ノ名ニ州ハ思州尾尾ニ生ル其ノ根ハ赤ク葉ハ青ク花ハ紫ク

和ノ名ニ州ハ思州尾尾ニ生ル其ノ根ハ赤ク葉ハ青ク花ハ紫ク

和ノ名ニ州ハ思州尾尾ニ生ル其ノ根ハ赤ク葉ハ青ク花ハ紫ク

和ノ名ニ州ハ思州尾尾ニ生ル其ノ根ハ赤ク葉ハ青ク花ハ紫ク

黄蜀葵

和ノ名ニ州ハ思州尾尾ニ生ル其ノ根ハ赤ク葉ハ青ク花ハ紫ク

紙を透くす増

和ノ名ニ州ハ思州尾尾ニ生ル其ノ根ハ赤ク葉ハ青ク花ハ紫ク

和ノ名ニ州ハ思州尾尾ニ生ル其ノ根ハ赤ク葉ハ青ク花ハ紫ク



老母草の實

老母草の實 老母草の實 老母草の實 老母草の實 老母草の實

豆

小豆・綠豆引・玄米・白米・赤米・黒米・黄米・紫米・青米・白米・赤米・黒米・黄米・紫米・青米

大豆・綠豆引・玄米・白米・赤米・黒米・黄米・紫米・青米

住吉

茸

花茸・魚茸・鹿茸・虎茸・豹茸・熊茸・狼茸・狗茸・猪茸・牛茸・馬茸・羊茸・兔茸・鼠茸

茸 茸

茸 茸

茸 茸

初茸

初茸のまゝ降出さ小るうれ 古 智 月

松茸

松茸 松茸

松露

松露 松露

松露 松露

松露 松露

遅稲

遅稲 遅稲

稲孫田シノタ

稲種や実入きく赤風はき 仙月

しつち種や赤きりくく赤きりく 赤沙

しつち田の穂穂伴赤きりく 赤

しつち種や赤きりくく赤きりく、山祐

しつち田より実のよきりく 上ヶ素徳

稲田より実のよきりく、雨相

しつち田りきりくく日整実のりく 下ヶ文朝

しつち種は赤きりく 赤

落と水

俱利伽藍や云々 赤

帳めうりふさのよきりく 赤

雨乞のしつち赤きりく 水、赤村

赤きりく赤きりく赤きりく 赤、赤村

赤きりく赤きりく赤きりく 赤、赤村

赤きりく赤きりく赤きりく 赤、赤村

赤きりく赤きりく赤きりく 赤、赤村

赤きりく赤きりく赤きりく 赤、赤村

赤きりく赤きりく赤きりく 赤、赤村

新米

赤きりく赤きりく赤きりく 赤、赤村

新酒

新米或は赤米の酒を造るなり古一葉

新米の酒を造るなり古一葉

新米や神酒を造るなり古一葉

新米や神酒を造るなり古一葉

新米の酒を造るなり古一葉

新米の酒を造るなり古一葉

新米の酒を造るなり古一葉

新米の酒を造るなり古一葉

新酒

古酒・新酒・中酒

新米の酒を造るなり古一葉

濁酒

濁酒の酒を造るなり古一葉

新葉

新葉の酒を造るなり古一葉

紅葉

紅葉の酒を造るなり古一葉

味

味を造るなり古一葉

名

名を造るなり古一葉

一

一を造るなり古一葉

新

新を造るなり古一葉

葉

葉を造るなり古一葉

近

近を造るなり古一葉



秋雨

しのき屋一の神のやあ〜〜世 冬 豊  
 ゆくゆくあきぬをやあ〜〜世 一七 世 終  
 葉高のたつ〜きあ〜 痛 志 終  
 相あ〜〜〜をあ〜〜世あ〜〜世 秋 子 子  
 竹のまゆ木のあ〜〜あ〜〜世 多の女  
 提と灯の照見よ世のけあ〜〜世 一 世  
 露さ〜〜やほあ〜〜世あ〜〜世 仙 月  
 陽あ〜〜あ〜〜世あ〜〜世 岳 嶽  
 葉のま〜〜あ〜〜世あ〜〜世 晴 風

露寒 秋霜

肌寒

夜寒

秋のま〜〜あ〜〜世あ〜〜世 海 了  
 秋のま〜〜あ〜〜世あ〜〜世 以 足  
 秋のま〜〜あ〜〜世あ〜〜世 上 心 星  
 秋のま〜〜あ〜〜世あ〜〜世 痛  
 秋のま〜〜あ〜〜世あ〜〜世 古 大 子  
 秋のま〜〜あ〜〜世あ〜〜世 暮 古  
 秋のま〜〜あ〜〜世あ〜〜世 梅 堂  
 秋のま〜〜あ〜〜世あ〜〜世 梅 堂  
 秋のま〜〜あ〜〜世あ〜〜世 梅 堂  
 秋のま〜〜あ〜〜世あ〜〜世 梅 堂  
 秋のま〜〜あ〜〜世あ〜〜世 梅 堂

朝寒

ちつりし物くきて寝る相定小 七 一 七  
 手の初より遠志くむよきむう九 一 無 七  
 本の字よなきよせおく相定小 七 中 七  
 炉のりよ子種くつせむ夜定小 七 多 七 代 七 中 七  
 末橋の目足くしむる相定小 七 京 七 赤 七 甫 七  
 筭あくく雨や相定小 七 下 七 甘 七 卜 七 外 七  
 叶ふくく一 七 所 七 先 七 け 七 け 七 相 七 定 七 小 七 九 七 重 七 龍 七 友 七  
 けくくせし 七 相 七 定 七 小 七 出 七 世 七 相 七 定 七 小 七 敷 七 七 七 為 七 心 七  
 朝寒のりよ北日 七 中 七 や 七 ち 七 の 七 ち 七 七 七 鬼 七 貫 七

朝寒

ちつりし物くきて寝る相定小 七 一 七  
 手の初より遠志くむよきむう九 一 無 七  
 本の字よなきよせおく相定小 七 中 七  
 炉のりよ子種くつせむ夜定小 七 多 七 代 七 中 七  
 末橋の目足くしむる相定小 七 京 七 赤 七 甫 七  
 筭あくく雨や相定小 七 下 七 甘 七 卜 七 外 七  
 叶ふくく一 七 所 七 先 七 け 七 け 七 相 七 定 七 小 七 九 七 重 七 龍 七 友 七  
 けくくせし 七 相 七 定 七 小 七 出 七 世 七 相 七 定 七 小 七 敷 七 七 七 為 七 心 七  
 朝寒のりよ北日 七 中 七 や 七 ち 七 の 七 ち 七 七 七 鬼 七 貫 七

朝寒 七 新 稿

とく寒

薄寒

冷スサマシ

霜踏麻

新綿

番綿

番綿 越前大坂より江戸  
一番二番三番有り  
定むる家も  
後戻を争ふ

日の入し山出え竹ハそく後、空

うそ空や美しうある謝の晴

何れ休のちるまをほしき日暮

夜よりちハ停しや寒く麻の泣

碧りくく寒くも燕の首高し

秋をふむも夕陽不流し峰の暮

里々今綿新らしき日如く丸

新らしや中し候うを掬りて

山古

結古

氷古

市古

玉古

徐古

玉古

美古

竹古

積雪を綿ありて理船子  
美岸の建建を以換益を

霜のともつふきりて露むら

秋のきけい何をむらむら

冬近きけいきよきよお物流し田

暮らも暮らも是る鬼を空近き

冬近うあうお世よよこころ

暮の秋葉をまはの秋あり

おのちを海のも人や暮の秋

露古

菊古

古

古

古

古

古

暮秋

行秋

うららかに柚子の黄を著る善の秋 下サ十條  
 行秋の四五日ふらふらとくさくさの乳 古本存  
 行秋を鼓弓のまねうらうらと舞 乙州  
 中々秋や河系折も菊のあはれ 一具  
 中々秋の性も目を著る甘菊 為山  
 行秋やさそひたせと煙し風 山方  
 行秋や軽うたふ屋程のうら 嘉永  
 行秋やぬきも行秋の途の末 アリ法民  
 行秋やぬきも影もささき 吾休文

秋惜ム

秋のうら

行秋の日和の末

佳風

見をらしの座りて秋を惜む

龜水

九月盡

九月廿七日の月を惜む

見し月や大方を惜む九月盡

古 其角

錦弓の弦引起せり九月盡、晴臺

堀も倉の味の家や九月盡、是夜

雨うききとくさくさ九月盡、志人

長夜

長き夜も旅の末に病をなす

古 玄来



丹

雲の白陣を夜の長き丸

長き夜を旅の本物とて

旅人の泊るよありし夜を

住吉の神送

晴のありて神出雲へ信りて中よ信志の神を建  
秋のありて信りて神出雲へ信りて九月三十日信り

一

秋

神送の思や住吉の神海

秋

秋の思や住吉の神海

秋

潤初るよやとて秋の思

練るよやとて秋の思

古梅 價



